

第六回特別展

絵巻と絵図

1986. 11. 17 (月) ~ 12. 19 (金)

学習院大学史料館

今回は、浜島家に伝来した絵巻（模本）  
と、阿部家文書のうち城下町・江戸屋敷  
の絵図を展示いたしました。

これらの展示を通して江戸時代の朝廷に  
おける文化の在り方の一端と大名家に残  
されている絵図の一部にふれて頂ければ  
幸いです。

学習院大学史料館

館長 金澤 誠

## 列品解説

### 1. 2. 伴大納言絵詞（模本）

原図（出光美術館蔵）は12世紀前半の作品。貞観8年（866）、伴善男ともによしおが応天門おうてんもん（大内裏八省院の正門）に放火し、政敵源信みなもとのまことに罪を負わせようとしたが、子供の喧嘩から偶然発覚し、流罪となった事件を題材にした絵巻。

この模本は、破損状態まで写しとるなど、原図におおむね忠実であるが、若干の差異もみられる。例えば、模本では「応天門炎上の場面」で墨による彩色を略すこと、人物の服に独自の彩色を施すことなどが行われている。原図は上・中・下三巻に分かれるが、模本では上巻を一巻に、中・下巻を一巻に写し、詞書ことばがきは省略されている。

### 3. 絵師草紙（模本）

原図（御物まよぶつ）は14世紀前半の作品。貧しい朝廷絵師が伊予国（愛媛県）を与えられ、一時は喜びの祝宴まで開くが、現地の農民は武力を持ち、年貢の実収は期待できず、子供は仏門にいれ、自らは絵筆に託し実情を遺すという物語。絵巻物としての価値を持つと同時に、中世における画家の生活を伝える史料としても大変興味深い。

この模本は、奥書により朝廷うごころの画所の蔵本を文政7年（1824）に高橋清章が写したものであることがわかり、詞書ことばがきは末尾にまとめて写している。原図にほぼ忠実であり、原図にみられる大ぶりの人物の描きかた、闊達な描線、家具・調度品、朽ちた住居の屋根・廊下などをよく模写している。

### 4. なよ竹物語絵巻（模本）

原図（金比羅宮蔵こんひらぐう）は14世紀前半の作品。ある年（建長3年<1251>）に、御門みかど（後嵯峨院）が恋をし、5月に女の家をつきとめ、女が零落した少将の妻であることを知る。女は夫に説得され、お召しに応じ、その縁で少将も世に出て、中将となるという物語。

この模本は、奥書により文政5年（1822）5月に高橋清章が写したものであることがわかる。模本に描かれる第一段・第二段・「為家卿亭の場面」は、すべてが金比羅宮蔵の原図にはなく、描かれている人物や構図の取り方などにも原図と若干異なるところがある。この模本が何を模写したものであるかは今後の検討課題としたい。

## 5. 陸奥国白川城絵図

阿部家文書 49

文政6年(1823)阿部<sup>まさのり</sup>正権より8代にわたって居城した陸奥国白川城の絵図。作製年代は不明である。

白川城は結城親朝が鎌倉時代に築城したものを寛永6年(1629)丹羽長重が改築した。阿武隈川(北側)を背にして城をつくり、周囲を侍屋敷でかため、外側の街道沿いに町屋を並べて、その外周辺に寺社を配するという近世城下町の典型的な形態を整えた。

阿部氏は松平定信の後をうけて忍<sup>おし</sup>より転じ、43年間在城した。

## 6. 現在の白河 ～白河城付近～

現在の福島県白河市の地図。明治20年代の東北本線開通によって、会津町及び廓内の侍屋敷地区の町割は破壊されているが、奥州街道とその沿道の町屋地区は原型をかなりとどめ、寺社も数多く残っている。

## 7. 武蔵国<sup>おし</sup>忍城絵図

阿部家文書 45

寛永16年(1639)阿部<sup>ただあき</sup>忠秋より9代にわたって居城した武蔵国忍城の絵図。

本図と同じ袋に保存されていた別図裏に「寛政8年より後、寛政10年前」と記された付箋が貼付されており、寛政8年(1796)に城主となった阿部<sup>まさゆり</sup>正由の頃の姿であると思われる。

忍城は低湿地の自然堤防上に位置し、周囲の沼沢地を堀として利用した平城であり、中世から戦国期には関東七名城の1つとされていた。

阿部氏は松平信綱の後をうけて下野国壬生城より転じ、184年間在城した。

## 8. 現在の忍(行田市) ～忍城付近～

現在の埼玉県行田市の地図。

列品NO.7と対照してみると、江戸時代からの道や寺社の多くが今も続いている様子がわかる。本丸跡は削平されて現在は野球場となっているが、町名として今も本丸の名が残されている。

9. 麻布御屋敷絵図

文化2年(1805) 阿部家文書 64

阿部家の江戸下屋敷内の見取り図。御殿・庭・藩士長屋などが坪数とともに細かく描かれている。

大名統制の一環として、幕府は諸大名に参勤交替並びに妻子を江戸に住まわせることを義務づけ、江戸に屋敷地を下賜する。これが江戸屋敷であり、藩主の住む上屋敷、予備邸宅としての中屋敷、物資貯蔵地・休息用の別邸としての下屋敷があった。

10. 現在の麻布 ～阿部家麻布下屋敷付近～

明治5年(1872)武家地と町人地の区別が廃止され、阿部家の下屋敷全体は「霞町」と命名された。その後、霞町は高級住宅地・商業地として栄え、現在は港区西麻布1丁目・3丁目、六本木7丁目に分割されている。

邸内を東西に走る道は六本木通りに、また西の境界線は外苑西通りに、それぞれ拡張されて面変わりしながらも、今も残っている。

学習院大学史料館スタッフ

館長	金	澤	誠			
	須	田	肇			
	生	田	享	子	大	園
	松	島	孝	人	齋	藤
					美	奈
					子	
					洋	一